



Veritas No.24(2003.11.20)

目次 (敬称略)

<岡田山の恵み—70周年記念に寄せて—>

浜下 昌宏

<特集> 岡田山キャンパス移転 70周年

石田 忠範

玉岡 かおる

川島 智生

栗栖 和孝

石村 真紀

<書評> 竹中正夫著『C・B・デフォレストの生涯』

松田 央

<オルチン文庫にある「讃美歌集」について その七>

茂 洋

無断転載を禁ず

<岡田山の恵み—70周年記念に寄せて—>

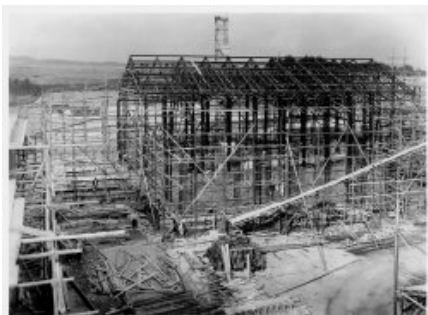
浜下 昌宏 図書館長 総合文化学科教授

図書館本館閲覧室

岡田山キャンパスは季節によって表情を変えるが、いつの時でも優しい。それは、些事によって心痛めている時には大いなる慰めであり、虚しさに胸ふたく時には大いなる励ましである。私たちは異常な時代にあって、一年を通じてわけ知らず多忙のために季節の移り変わりすら味わう余裕がない。春の花見も晩秋の紅葉狩りにも出かけられない不満が募ってくる。しかし、まこと幸いにして、花見も紅葉狩りもこの岡田山で可能なのだ。たしかに次々と追ってくる雑事に心は荒むが、しかし、ほんの数分でも時間を見つけて社交館にでもコーヒーを飲みに行こうとすれば、それだけでその行く道で、いつのまにか気持は落ち着き思索の余裕が生れてくる。「余裕」とは、”school”の語源でもあるギリシャ語の”scholē”のことであり、「余暇」のことであるが、学校暦の時間割ではけっして余裕をもてない私を感じる「余裕」とは心の中に生じるものである。片付いた部屋の間隙のように、あるいは、雲が去って広がる青空のように、画き込みを受け入れようとする空間である。白いキャンパスが生れれば、自然とそこに画き込もうとする意志と喜びとが湧き上がる。「自然という大きな書物」に触れ、読み解く喜びが与えられるのだ。私は岡田山のこの美しさを大いなる恵みとして、設計者のヴォーリズ博士をはじめとする、このキャンパスの創設に関わった人たち、そして今なおメンテナンスに努力されておられる人たちに感謝する。その人たちが、このキャンパスを構想し、建設費用を工面してくれたのであり、今日なお労力をかけて維持するときのたいへんなエネルギーに脱帽する。全体のバランスのよさと細部の配慮への巧みさ。世事に塗れて清らかさとは程遠い私自らは、このキャンパスの美しさにふさわしくないのかもしれない、と時に思う。しかし、岡田山キャンパス70周年を祝った今年は、自分の営みを反省しながらも与えられている恵みに感謝するよい機会であろう。(なお、岡田山キャンパス70周年に関わる拙稿は『めぐみ』92、『学報』139、等に掲載されている。ご関心の向きは参照されたい。)

空から見た移転時の岡田山キャンパス全景





<特集> 神戸女学院岡田山キャンパス70周年

シンポジウム「学舎が教育する」 — ヴォーリズの祈りと建築 —

石田 忠範 一粒社ヴォーリズ建築事務所相談役

ウィリアム・メレル・ヴォーリズは、1880年、アメリカ合衆国レブンワースに生まれ、1905年にキリストの伝道を使命として来日、信徒伝道者として県立近江八幡商業学校の英語教師のかたわら、バイブルクラスを始めます。学生の圧倒的な人気の故に、町では反対意志の声があがり、解職となります。

期せずして、高校生時代から自らの職業として志望していた建築家として再起、1908年にヴォーリズ建築事務所を創業して以来、1500余の建築作品を残しました。その作風は、殊に一般市民から親しまれ、近代建築の反省とともに、最近とみに見直されるところとなり、その保存活動もニュースとして取り上げられています。

1964年に逝去するまで、戦時中も日本人となって日本に留まり、新聞などでは米国人建築家と紹介されている一柳米来留（ひとつやなぎ・メレル）です。

ひたすら自己を「神様の道具のひとつにすぎない」と自覚し、かみさまが「これをどのように用い給うかということに（のみ）、心を砕いた」メレル・ヴォーリズは、建築を自己宣伝の道具とし、形を追うモダン建築の流行を警戒し、ときに、二流である、あるいは時代遅れの様式主義者と評されることがありました。しかし、ヴォーリズの建築作品や言葉からは真の意味でのモダニストともいうべき姿勢を読み取る事が出来ます。

シンポジウムのタイトル『学舎が教育する』は1933年の同窓会誌『めぐみ』に掲載された設計者ヴォーリズの『神戸女学院新建築の要素』と題する寄稿から来ています。

「……もしもこの（神戸女学院の）建築が真に成功したとすれば、その最も重要な機能の一つは、永年の間に人々の心の内に洗練された趣味と共に美の観念を啓発する事でなければならない。」

「校舎は生徒の精神経験に影響を及ぼす。」「生活の霊的方面を無視して教育は不完全である。」と考えたヴォーリスにとって、ミッション・スクールである神戸女学院の建築は格別の興味を以て取り組む、いわば彼の正念場でありました。

「建築物の品格は、人間の人格の如く、その外装よりも寧ろ内容にある。」

「凡そ住宅なるものは、その元來の目的は、住居するためのものなりとの見解を持つべきである。同じ解釈により、次のことが言へる。すなわち、學校とは、教育的計画を収容する特別の機關であり、病院は、病人を治療するために、病人の自然回復力と共働せんとする機械であり、商店建築は、商業取引の能率のあがる中心的建物である。それ故にこれ等の各種の建築物は、建築技師の自分勝手な好奇心や、空想を以って、形造る枠組、又は、自家宣伝用の広告塔、更らに、街頭の通行人を驚嘆させるための博物館向の作品の様に心得て、建築設計に当たることは、將來ある建築技師の欲せざるところである。」

「……現在焦眉の急を要する日常生活の使用に対して、住心地のよい、健康を護るによい、能率的建物を要求する熱心なる建築依頼者の需に應じて、吾々はその意をよく汲む奉仕者となるべきである。」（ヴォーリス事務所建築作品集1937序言より）

「当建築事務所はただ一人の舞台ではない。」「専門家同志の相互扶助をなしうる事務所」を目指し、チーム・ワークを重んじたヴォーリスは建築の基本となる平面計画を主として担当し、「バンザイ出来ました。」と云ってスタッフに手渡した「使う人の立場から考え抜かれた無駄のない合理的な平面」スケッチはヴォーリスの信仰そのものでした。

建築への一般的理解は『実用的な建物』と『特定の建築様式を持った芸術作品』の両極に分化する傾向にあります。建築の歴史学において、建築を芸術作品として造形芸術の一ジャンルに置き、建築の形態や様式そのものの歴史を外在的原理に則って理解し解釈する態度である『様式史』が主流となっていました。このことが建築の一般理解に大きく影響を与えてきたように思われます。そこで、建築の歴史を『空間の意味の歴史』として理解する『空間史』の立場が重要になります。

建築は単なる実利的建造物ではありませんが、実用性・有用性を無視しては成立しません。しかしながら、この実用性なくして成り立たない建築は、その空間の中で（厳密に言えば、空間において）、『からだ』であるとともに『ところ』でもある人間が、身体的に行動し、精神的に生きる筈の空間です。したがって、そのかけがえのない空間であり、建築（architecture）の名に値する実在は単なる建物ではなく、すべからく芸術であります。

神戸女学院岡田山学舎は、人間が『からだ』と『ところ』をもって住まう空間として備えるべき品格を、「外見にではなく内容」に求めた結果なのです。

神戸女学院の建築は日本有数の美しいキャンパスとして定評があり、ヴォーリスの代表作に位置づけられています。今も、創建時の設計理念が見事に受け継がれて、学生数の増加や教育内

容の変化に対応する有用性を増し加え、単なる保存ではなく、優れた教育施設として活用されているキャンパスとして、ともすれば耐用年限の短い日本の建築事情のうちにあって、希有の例であると言っても過言ではありません。

近年、国際化に向かう新しい時代の女性高等教育は大きな転換期にあります。今、岡田山学舎70周年にあたり、外観を単なるファッションとして継承するのではなく、創立の精神の構造化であり、歴史の出来事をとどめる、かけがえのない空間の深い意味内容をさらに受け継いで、新しい時代にふさわしい教育の場所として益々性能を高めながら、活用され続けてゆくことが望まれます。

私と岡田山 キャンパスのメッセージ

玉岡 かおる 作家

神戸女学院の思い出は、キャンパスぬきには始まらない。それも、北寮、新寮での生活により、キャンパス内に住んだ縁が、いっそう私の思い出を色濃くする。

寄宿舍生活については拙著『恋をするには遅すぎない』（角川文庫）に著したのでそちらに譲るが、美しい菱形の洋館で暮らした時間のすべては、今ではどうやっても得ることのできない貴重なものだ。

思うに、我々日本人は、永く範としてきた儒教の影響もあって、学び舎という箱モノに対して贅沢をしなかった。ポロは着れども心の錦、よき師よき志があれば、たとえ松の樹の下であっても立派な学校、という精神論のたまものである。だが、明治の文明開化は、すぐれた欧米の学問が美しくゆとりあるキャンパスから生み出された事実を教えた。

わが神戸女学院はまさにそんな時代、欧米の文化がもっとも輝いて日本の扉を開いた時期に創られた。そのすみずみに、当時の熱い息吹が生きているのは当然だろう。この同じ場所に立つことは、当時のたぎるようなメッセージをも共有することだ。母校を訪れ、校舎を仰ぐたび、背筋が伸びる気がするのは、きっとそのせいだろうと思っている。

神戸女学院—愛でられたキャンパスと設計者である外国人建築家の美意識

川島 智生 本学非常勤講師(建築史学専攻)

ヴォーリズという外国人が七十年前に造り上げたキャンパスの景観を、現在の我々は愛でる。このことはなにを意味するのか。明治以降日本は欧米の技術を以って、国づくりに励んだ。建築とはお雇い建築家コンドルが来日することでスタートする。教育についても女子高等教育ではキリスト教系の経営による私学が過半を担った。したがって外国人の宣教師や牧師・神父らがその校舎の設計を担った。神戸女学院もそのような構図のなかであって、多くの女史の尽力によって築きあげられてきたという歴史がある。移転をむかえた大正昭和戦前期以降にその設計は外国人建築家の手に代わる。総務館から中庭を望む

神戸女学院の現在のイメージ成立にあたっては、スパニッシュスタイルによって統一された校舎という建築の力によるものが大きい。それらの校舎がクワドラングルと呼ばれる中庭に面することで、その効果はより際立つことになったといえる。そのキャンパス計画について、当初ヴォーリズは現在のグラウンドにも及ぶような広大な中庭を設ける計画を立てていたが、校舎建設以前にこの地にあった尼崎藩主である桜井別荘の配置を考慮して、計画を立て直した。つまり、桜井邸の庭園を利用する新案がつけられる。現在、われわれが見る風景はこの計画によるものである。庭石の一部が利用されている。最初の中庭と比べ小規模な面積になるものの、むしろこの方が成功に繋がった。かつて存在したものを継承すべく、ある制約を受けることで、より素晴らしい空間が形成されたひとつの事例といえる。中庭にいると居心地がよい最大の理由は、中庭の間口と奥行、面する校舎の高さなどの絶妙なバランスが醸成したものにほかならない。これらの空間はヴォーリズという外国人建築家がつくりあげた。

ヴォーリズもまた、「日本」を意識せざるを得なかった外国人建築家だった。ヴォーリズも幻に終わった大蔵谷キャンパスの設計者であったマーフィーもまた、日本風の建築スタイルを最初校舎に対して提案していた。神戸女学院中庭のなかでもっとも際立つ建築である図書館は当初、日本の城郭風の建築スタイルになる可能性もあった。マーフィーの大蔵谷キャンパスでも巨大な仏教寺院風校舎が提案されていた。これらのスタイルは日本人教員の間で猛反対が起き、葬り去られることになる。共通して外国人建築家たちは「日本」という固有の建築スタイルにこだわり、一方で日本人教員がそのようなスタイルに反対するという構図がみられたことは、近代日本における学校の建築スタイルを考える上で興味深い。つまり洋風建築が学校建築のスタイルの定番になっていたことが背景にあったと考えられる。また、ここからは外国人建築家たちが「日本」というものをどのように捉えていたかが読み取れる。神戸女学院のなかでヴォーリズが遺した「日本」のスタイルとは、図書館の天井梁に施されたステンシル・ペイント(型板を用いて塗る塗料)による装飾文様にある。その意匠はアラベスク風の模様といえるが、ヴォーリズは日本の天平時代に由来するデザインと記した。外国人建築家による「日本」がここに表れ出ている。

動と静の調和

栗栖 和孝 英文学科専任講師

理学館から見た文学館

私が神戸女学院大学に赴任して二年目になります。一年を通して神戸女学院の四季や時間の流れを一通り経験しましたが、季節ごとに変化を見せる自然の風景、また季節を通じて常に同じ姿で佇む建築物ともに、私にとって落ち着くことのできる空間です。

積極的に外出する機会が少ないこともあり、日頃から自然に対して特別な関心を持っているわけではないですが、正門からキャンパスに向かう一帯を彩る春の桜や秋の紅葉には自然の美しさを感じずにはいられません。キャンパスを飾る豊かな自然にどこか安堵感を覚えている自分を意識することもあります。

英文学科に所属している関係で、授業の多くを文学館で行います。文学館は歴史ある建物ですが、教室のドアが大変気に入っています。無機質ではない木製のドアに温かみを感じ、落ち着いた気持ちになることができます。

四季折々に変化する動の外観と常に同じ姿を保つ静の建物は当然の如く一体感を奏で、神戸女学院全体の風景を落ち着いたある空間にしています。このような空間を自分の職場とし、教育と研究の機会を与えられたことを大変光栄に感じます。

末筆ながら、教職員の一員としてこの度の岡田山キャンパス 70 周年記念を心から祝福致しております。

Halloween in Kenwood House 1973

石村 真紀 文学部事務室

1971年に中学部に入学した私にとって、今年はキャンパス 32 周年です。その間、生徒として職員として、四季折々の自然と調和したキャンパスのすばらしさを満喫してきました。学舎はもとより体育館やグラウンド、プール、テニスコート、寮、社交館、静思庵等々。また職員となって勤務した部署は、それぞれ違う建物に事務室があり、今では学内で知らないところはほとんどなくなりました。

しかし残念なことに、とりわけ思い出深い建物の多くは、先の阪神大震災で失われてしまいました。東寮(中高部寮)、グリーンウッド館(宣教師館、のち史料室)、実習館(大学家政学部実習施設)。敷地の北東部にあったこれらの建物群は、教員や学生生徒の生活の場であり、学舎とはまた違った趣がありました。が、現在このあたりで往時の面影を残しているのは、中高部のミッショナリー教員のお住まいだったケンウッド館だけになってしまいました。

特にこの時期になると、ケンウッド館でのハロウィンパーティのことが懐かしく思い出されます。当時、東寮での七夕パーティに先生方をお招きした返礼として、ハロウィンに東寮生何人

かが招かれることになっていました。パーティは楽しそうだけれど、先生方と英語でお話しするなんて・・・初めてパーティに出席することになったとき、私はコチコチになって先輩の後についていきました。が、ケンウッドに一歩足を踏み入れると、そこは映画やTVでしか知らなかったアメリカの日常生活の世界、見るもの聞くもの食べるもの、初めて経験するものばかり。毎日ハードな寮生活を送っている私たちのすぐそばにこんな世界があったとは！その驚きと、さっぱりついていけない英語と、たいそう甘いお菓子里目に目を回して、中3の私は寮に帰ったのでした。

30年前、キャンパスの一角での出来事です。

<書評>

竹中 正夫著『C・B・デフォレストの生涯』

松田 央 総合文化学科教授

神戸女学院第五代院長C・B・デフォレスト先生は、「神戸女学院の中興の祖」と称すべき人物である。彼女はアメリカ人宣教師として神戸女学院の教育と日本の福音伝道のために三五年間働き、また戦争中は帰米して日本人収容所で日本人のために真摯に尽くした。そして一九七三年に地上の生涯を終えた。そこでデフォレスト先生没後三〇年に当たる今年に、竹中正夫先生（同志社大学名誉教授・神戸女学院理事）が『C・B・デフォレストの生涯---美と愛の探求---』という著書を創元社から刊行された。

デフォレスト先生は日本の国をこよなく愛し、日本人の心と文化を深く理解していた。彼女はアメリカ人宣教師の娘として大阪で生まれ育ち、生まれてから約一五年間日本に暮らしているが、これは非常に重要な事実である。つまり、彼女の体にはアメリカ人の血が流れていたが、その心には日本人の精神が宿っていたと言える。竹中先生は、そのような精神性に注目され、第一次資料にあたりながら、彼女の足跡を綿密に分析されている。要するに、キリスト教と日本の文化との融和というテーマが本書の多くの箇所で述べられているが、それは竹中先生ご自身のライフワークでもある。そのことは先生の多くの著書から推察することができる。そのような先生の学究的情熱がデフォレスト先生の精神と見事に解け合って、独特の和やかな暖かい雰囲気を出しているように感じられる。

それに関して、本書では次のように述べられている。「日本に生まれ、日本の文化を深く愛していたデフォレストは、神戸女学院をアメリカ文化にどっぷりとつかったハイカラな学校にしようと思わなかった。確かに閉ざされた日本の殻を破って、国際的な視野を持った女性指導者の輩

出を目指したが、それは同時に日本の文化と教養を身につけた人間の形成を重視するものであった。そしてその根底には、聖書の愛神愛隣の教えがあると確信していた」。神戸女学院大学の学生の中にはこの文章に共感を抱いた人が少なからずいたことをここで報告しておく。

ところで本書によると、デフォレスト先生は病気のために一九四〇年に神戸女学院を退職して、いったんアメリカに帰ったが、一九四七年に再び神戸女学院に復帰している。復帰後最初のチャペルで彼女は、「私たちの国籍は天国にある」(フィリピ三・二〇)という言葉を中心にして講話をしているが、本書では残念ながらその内容については言及されていない。果たしてそれがどのような話だったのか、すこぶる気になるところである。デフォレスト先生はなぜこの聖句を選んだのだろうか。天国についてどのように語られたのだろうか。竹中先生がそれについて今後研究していただけると大変うれしく思う。

(なお、この書評は『キリスト教学校教育』473号(キリスト教学校教育同盟発行)より、松田先生と同紙の許可を得て転載させていただきました。)

<オルチン文庫にある「讃美歌集」について その七>

茂 洋 本学名誉教授

全部の讃美歌に、はじめて木版ではあるのですが、五線紙による楽譜が付いた大変特徴のある讃美歌集「讃美歌並楽譜」(15)(1882年・明治15年)の説明を続けます。

同じ明治15年に、日本ではじめて「小学唱歌集」が出版されました。その表紙には「明治十四年」と記されていますが、実際に出版されたのは、十五年でした。はじめ文部省は、音楽が何であるかよく理解出来なかったために、伊沢修二さんに依頼してアメリカから音楽教師を迎えました。それが、メーソン(Mason, Luther Whiting 1818-1896)という人でした。彼の助けを得て「小学唱歌集」が、日の目を見るのですが、実は彼は宣教師になりたいぐらい熱心な組合教会派(congregational church)のキリスト者でした。きっと組合教会宣教師で、「讃美歌並楽譜」(15)を編集していたカーティスと親交があったことでしょう。そこで、同じ明治十五年にそれぞれ木版で、「讃美歌並楽譜」と「小学唱歌集」とが、同時に世に出たことになります。しかも「小学唱歌集」の三分の一ほどは、讃美歌から採られているとさえ言われています。二つほど実例を挙げてみましょう。



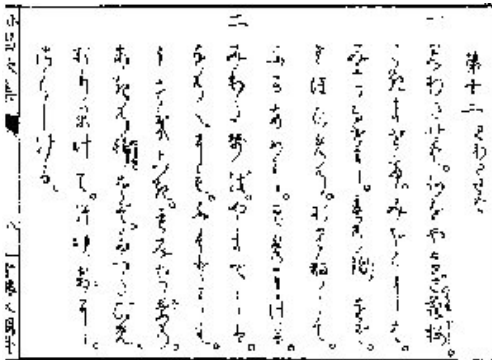
この曲は、よくご存知の「むすんで ひらいて」の曲です。これは、はじめこの讚美歌に登場しました。一節の歌詞はこうなっています。

- 1 アアきみのきみなる エホバのかみよ
- あれのにまよえる われたびびとぞ
- マナのごとあめの かてをふらせよ

これを「小学唱歌集」13には次のように用いました。

「小学唱歌集」13の楽譜と歌詞





一節の歌詞

みわたせば あをやなぎ はなざくら
 こきまぜて みやこには
 みちもせに はるのにしきをぞ
 さほひめの おりなして
 ふるあめに そめにける

同じ歌とは思えないほど、音が下がっていて、歌詞は日本調に変えられています。一度歌って、比べてみて下さい。

もう一つあります。それは、クリスマスの歌です。

15-20



一節の歌詞

たみみなよろこべ きみきたれり
 よろづのものいま きみをみよな
 すべてそのきみの たすけをうく
 のもやまもうみも いわいうたへ

この歌詞の原詩は、有名な “Joy to the world, the Lord is come” で、現在は「もろびとこぞりて むかえまつれ」と歌われて、クリスマスを代表する歌となっています。

ところが、ここでは、この歌が、スコットランド民謡の Auld Lang Syane の曲で歌われています。この曲は、きつとっと以前から日本人の中で好んで受け入れられていたのでしょう。

この曲は、「小学唱歌集」では、今でも歌われている「蛍の光」として用いられています。最初に用いられた「蛍の光」は、「小学唱歌集」20でした。

「小学唱歌集」20



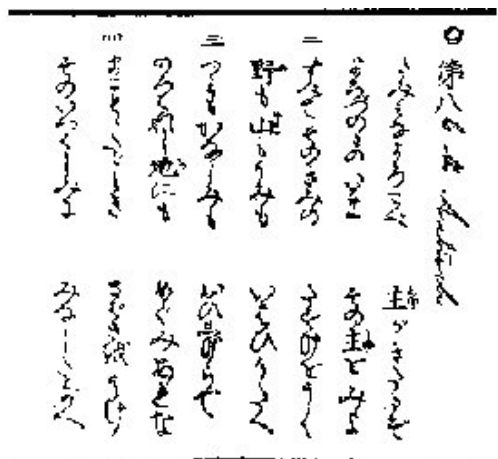
一節の歌詞

ほたるのひかり まどのゆき
ふみよむつきひ かさねつつ
いつしかとしも すぎのとを
あけてぞけさは わかれゆく

同じ曲が、「讚美歌竝楽譜」(15)(1882年・明治15年)では、クリスマスの曲になり、はじめての「小学唱歌集」では「蛍の光」になっているのです。

話は前後しますが、“Joy to the world” は、「讃美歌並楽譜」(15)では Auld Lang Syane の曲で歌われていますが、もっと前の明治9年の「改定讃美歌」22では、すでに現在歌われている Anioch で歌われていました。

「改定讃美歌」22-08



歌詞はもっと原始的で、一節は次のようになっています。

たみみなよろこべ 主がきたるぞ
 よろづのものいま その主をみよ

やはりこの明治9年の歌詞に、明治15年の「讃美歌並楽譜」(15-20)では、手が加えられて、歌いやすくなっていますね。

こうして、すべての讃美歌に、多くの手が加えられ、歌詞も曲も大幅に改定された傑作が、「新撰讃美歌」(69)なのです。